

木戸窯跡群

第2次発掘調査現地説明会資料



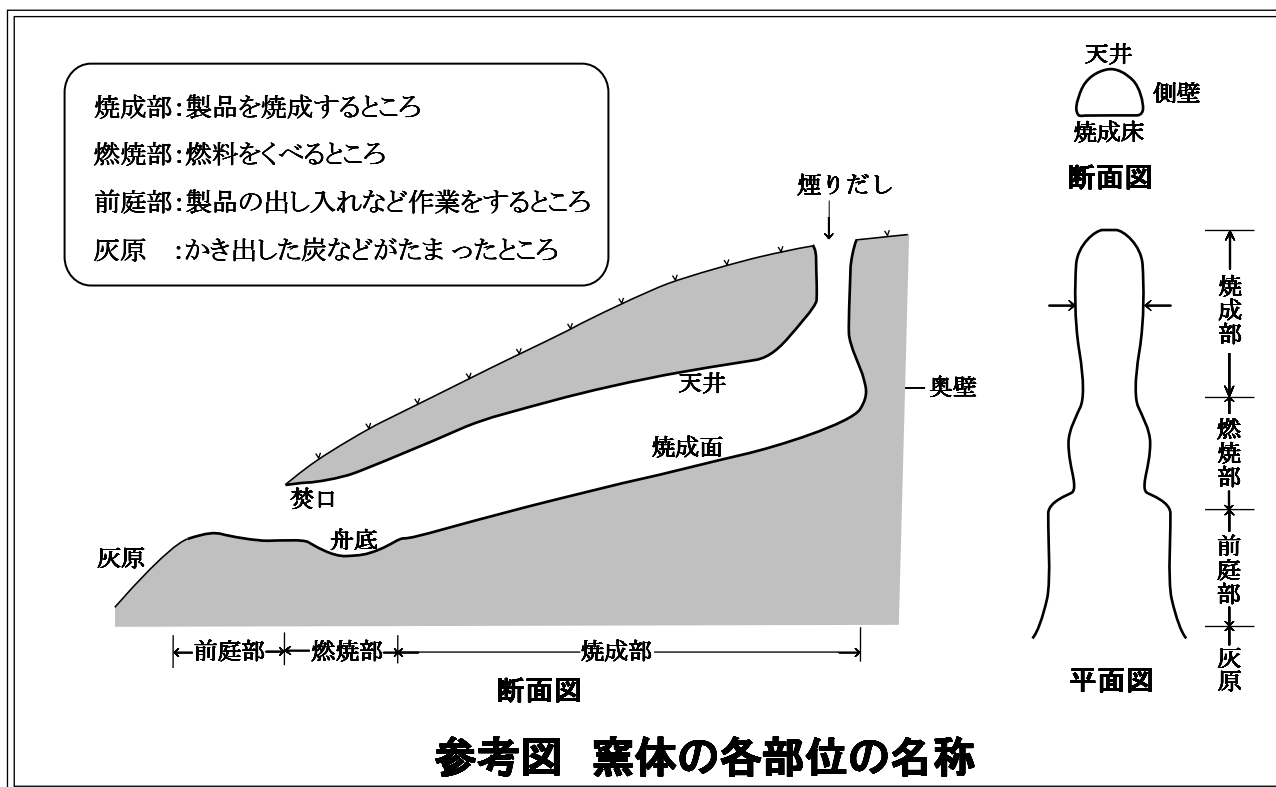
B地点 窯跡1

主催:宮城県多賀城跡調査研究所
共催:田尻町教育委員会

平成17年 7月9日(土) 10:30～

調 査 要 項

遺 跡 名	木戸瓦窯跡
遺跡の性格	多賀城創建期の瓦や須恵器を焼成した窯
調査主体	宮城県教育委員会（教育長 白石 晃）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 小井川和夫） 小井川和夫・阿部恵・古川一明・天野順陽・吉野武・関口重樹
調査共催	田尻町教育委員会（教育長 佐藤吉則）
調査指導	多賀城跡調査研究委員会
調査期間	平成17年5月23日～7月22日（予定）
調 査 区	【B地点】田尻町沼部字木戸56他 地権者 井上 征男 調査面積 約300㎡ 【C地点】田尻町沼部字木戸45他 地権者 小茄子川末子 調査面積 約300㎡
調査協力	加藤節幸（木戸区長）、トウダ電子株式会社
調査参加者	安藤みよ子・井上千代子・櫻井友梓・佐々木貞雄・高泉一秋・ 高橋和恵 高橋修逸・流矢重之・行澤良雄・門間光



1 遺跡の概要と調査目的

木戸窯跡群は多賀城創建期の瓦や須恵器を生産した窯跡として、下伊場野窯跡群（松山町・三本木町）、日の出山窯跡群（色麻町）、大吉山窯跡群（古川市）とともによく知られています。その範囲は東西約 500 m、南北約 1 km の広範囲に及び、大きく 3 つの地点（A ～ C 地点）に捉えられています。A 地点は窯跡群の北側に位置するもので、その一部が国史跡に指定され史跡公園として整備されています。昨年度、国史跡指定地の西側を調査し 8 基の窯跡を確認しました。B 地点は窯跡群の南側に位置します。A 地点の南方約 500 m にあたります。昭和 30 年代に東北大学が丘陵西斜面を調査し、数基の窯跡を発見しました。C 地点は B 地点の東側約 300 m にあたります。丘陵尾根上を通る県道田尻瀬峰線を挟み東西両斜面で窯跡を確認しています。このように現在約 30 基の窯跡が知られていますが、周辺にはさらに多くの窯跡が存在していると予想しています。

また本遺跡は過去に「^{（にひた）}くんなかむらごうおさべのさとちやうにひやくちやうはせつかべのあざひと 郡仲村郷他辺里長二百長丈部皆人」とヘラで文字が書かれた平瓦が採取されています。本窯跡が操業していた奈良時代前半は、木戸周辺は新田郡の一部でしたが、この瓦により当時の日本最北域の郡に郷里制が施行されていたことが明らかになるなど東北古代史を考える上でも重要な遺跡です。

しかし、これまで数回の発掘調査等が行われたものの報告書が刊行されておらず、遺跡の重要性に比して情報量が少ないのが現状です。このため、発掘調査を実施して遺跡の範囲を明確にすることや、窯跡や遺物の内容を知ることは大変重要なことと考えています。

このような考えに基づき、平成 17 年度は A 地点の約 500 m 南の B 地点と、その東側の丘陵裾部に位置する C 地点の発掘調査を行い、過去の調査や平成 16 年度に実施した A 地点の調査成果とあわせて木戸窯跡群の様相を把握したいと思います。



2 これまでの調査成果について

木戸窯跡群について、これまで行われた調査等で次のことがわかっています。地点ごと概要を記述します（～は第1図の番号と対応します）。

A 地点

東北大学が、昭和29（1954）年、現在、国史跡に指定されている場所の東側にあたる沼部字北沢81宅地裏で削平された窯跡の断面を確認し、遺物を採取しました。

宮城県教育委員会が、昭和49年9月、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（現在の独立行政法人奈良文化財研究所）の協力を得て磁気探査による調査を行った結果、5基の窯跡を確認しました。この場所は昭和51年に国史跡となり、公園として整備されています。

昨年度、宮城県多賀城跡調査研究所が発掘調査を行った結果、8基の窯跡を確認し、このうち2基を調査しました。多賀城創建期の瓦や須恵器などが多数出土しました。3号窯跡から出土した鬼板は初見のもので貴重な発見でした。

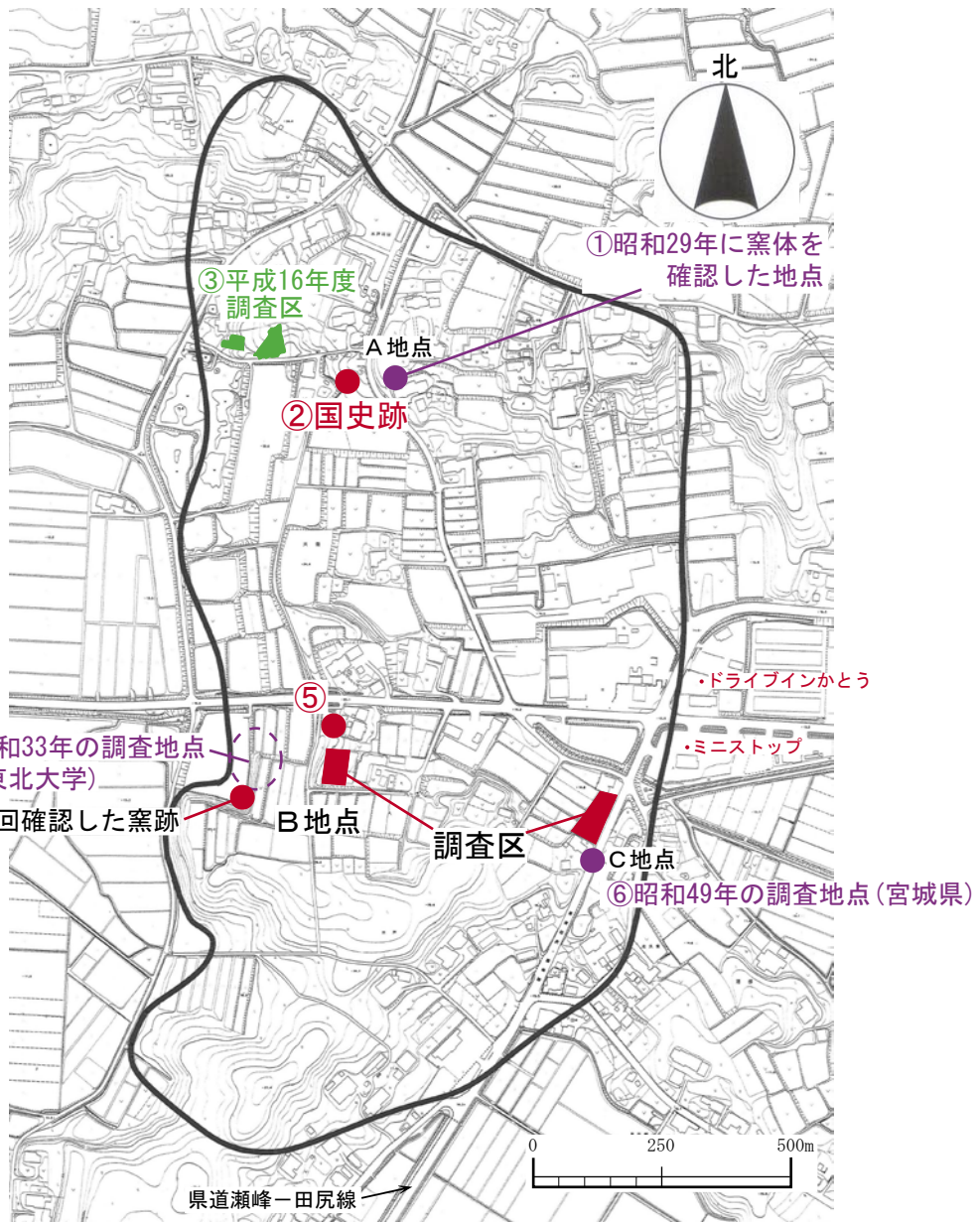
B 地点

東北大学が、昭和33（1958）年、今回の調査区の反対側になる丘陵西斜面を調査し、瓦や須恵器が出土しています。また、地主の井上征男様から「丘陵西斜面に窯跡らしい落ち込みがある」との情報を得たため、付近を調査した結果、崩落して、窪み状になっている窯跡1基を確認しました。詳細は不明ですが、位置的に東北大学が調査した窯跡と一連のものである可能性があります。

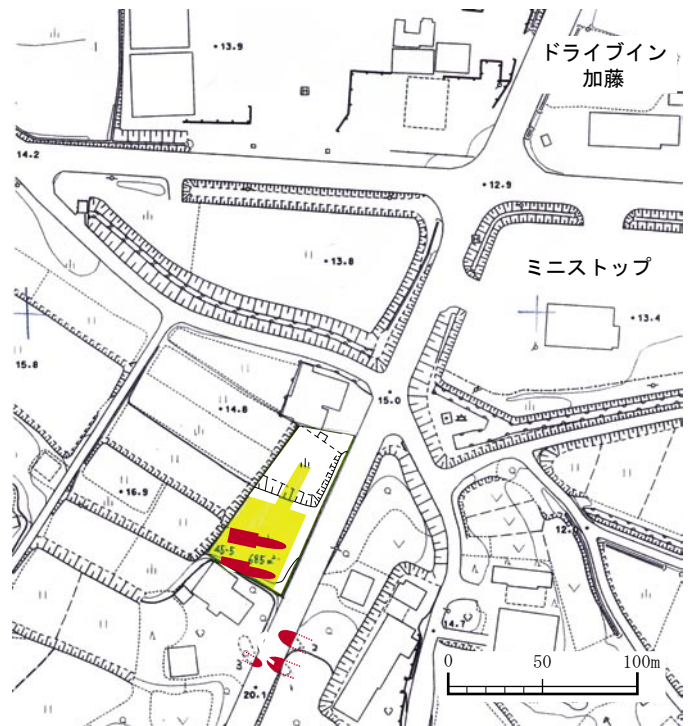
今回調査したB地点北側の中条様から「自宅裏の斜面に3基の窯跡があり、以前、瓦が多量に出土した」との情報を得ました。窯跡1と一連のものと考えられます。

C 地点

宮城県教育委員会が、昭和49年、県道田尻瀬峰線工事中に偶然発見された3基の窯跡のうち路線内の2基を調査し、多賀城創建期の瓦、須恵器などが出土しました。なお、残る1基は、現在の小茄子川様宅入口北側で煙道部を確認したものです。幸いにも道路法面に位置するため保存されています。



木戸窯跡群B地点



木戸窯跡群C地点

第1図 調査区の位置

3 発掘調査の成果

今回、B地点で窯跡1基、C地点で窯跡2基、整地層などを発見しました。遺物は多賀城創建期の瓦が大半で、整理用平箱で130箱以上出土しました。以下、調査区ごとに説明します。

B地点

丘陵東斜面で地下式^{あまがな}窖窯跡1基（窯跡1）を発見しました。なお、調査区南側は東から大きな沢が入り込んでおり遺構はありません。

窯跡1

調査区北端で発見しました。全体的に残りが良く、ほぼ全体の様子がわかります。
【大きさ】全長約11m、焼成部の最大幅約1.5m、深さ約1.5mです。煙だし付近の天井が残存しています。

【平面形等】前庭部は隅丸長方形、燃焼部～焼成部は長楕円形ですが、燃焼部と焼成部の境は少しくびれています。

【燃焼部～焼成部】瓦を焼いた焼成面は3枚以上あり、壁の補修を繰り返し使用されています。焼成面には焼成の時に瓦の下に敷いた焼台が多数残っていましたが、製品はほとんど残っていませんでした。

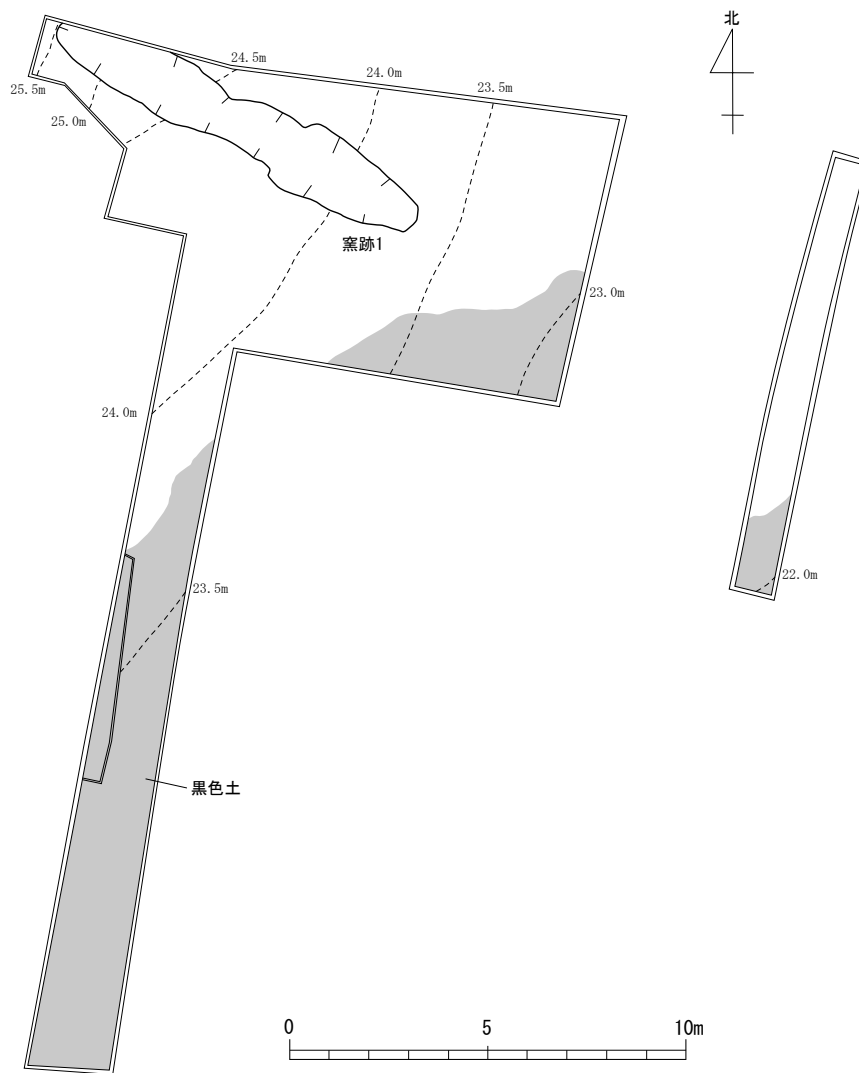
【前庭部】燃焼部から掻き出された焼土や炭が多量に溜まっています。このなかに多数の瓦の他、数点の須恵器坏、甕が含まれていました。また、この窯跡の天井が崩落した後の窪みからは焼成不良の軒丸瓦や歪んだ平瓦が大量（平箱約100箱）に出土しました。多賀城に出荷できない「不良品」を投げ捨てたものと考えられますが、多賀城創建期のまとまった資料が得られました。

C地点

湿地に近い丘陵西斜面で地下式窖窯跡2基（窯跡2・3）、整地層1箇所などを発見しました。窯跡2・3は約4～5mの間隔で、整地後に作られています。

整地層

調査区西側で整地層を確認しました。旧表土上に盛土をして地形を平坦化したもので、西側ほど整地層が厚くなっています。窯詰めなどの作業を容易にするためのものと考えられます。



第2図 木戸窯跡群B地点 遺構配置図



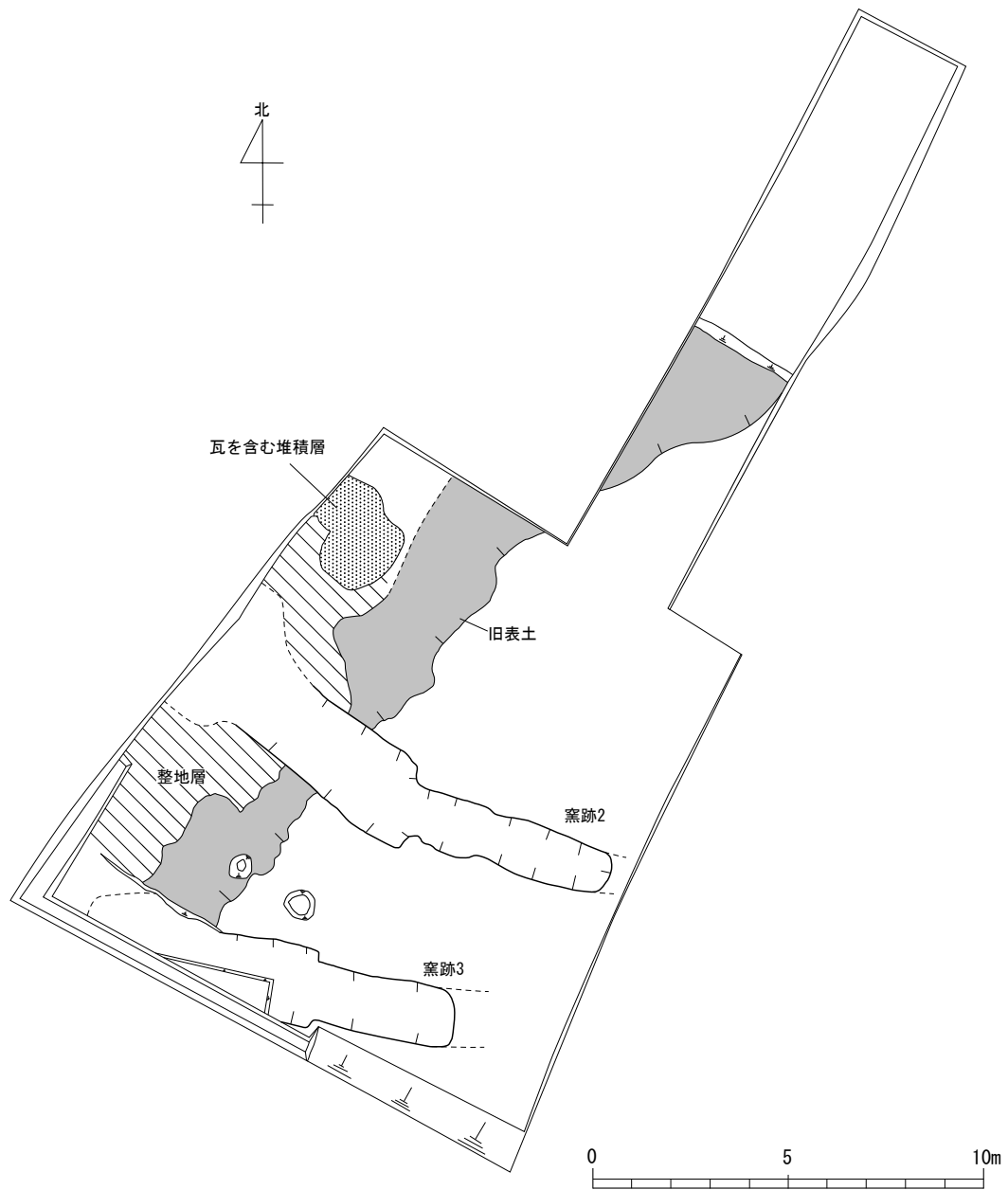
①窯跡1 上から3番目の床面(東から)



②窯が崩落した後に捨てられた瓦



③焼成不良の軒丸瓦・丸瓦



第3図 木戸窯跡群C地点 遺構配置図



C地点西側（南から）
旧表土(茶色)上に黄色の整地層がみられます。

窯跡 2

焼成部から前庭部を確認しました。

【大きさ】全長（残存長）約 10 m、燃烧部の最大幅約 1.5 m、深さ約 50cm です。

【平面形等】全体的に逆「く」の字形になっています。前庭部は隅丸長方形、燃烧部～焼成部はやや丸みがある長方形で、燃烧部と焼成部の境は少しくびれています。

【燃烧部～焼成部】床面は2枚あります。新しい段階の第2次床面は第1次床面を嵩上げした後、北側に10～30cmほど拡張して作られています。そのため逆「く」の字形に見えます。側壁は青色がかかった灰色で焼け締まっていますが、崩れ落ちた場所では繰り返し粘土で補修した様子が観察できます。第1・2次焼成面では焼台が残っていましたが、製品はほとんどありませんでした。

【前庭部】前庭部中央部はやや窪んでおり、中央から西側の湿地に向かって幅約20cmの排水溝が延びています。この排水溝を覆うように燃烧部から掻き出された焼土や炭、焼成部を拡張した際の排土などが多量に溜まっています。



窯跡3

焼成部から前庭部を確認しました。

【大きさ】全長（残存長）約6 m、幅約1.5 m、深さ約70cmです。

【平面形等】前庭部は隅丸方形、燃焼部～焼成部は丸みをもつ長方形で、燃焼部と焼成部の境は少しくびれています。

【燃焼部～焼成部】床面は3枚ありますが、一番古い第1次床面は未調査です。

第2次焼成面は階段状になっているのが特徴的で、焼成面にくっついた瓦の状態から窯詰めの様子がはっきりとわかります。ここでは、瓦を立てて瓦の凸面と凹面を交互に合わせ、階段1段につき14枚を焼成しています。

第3次床面は第2次床面の階段を解消するように嵩上げし、斜面の焼成面に作り直しています。同時に側壁に粘土を貼り補修しており、わずかに焼成部の幅が狭くなっています。第3次焼成面には焼台が数十枚残っていましたが、製品はほとんどありませんでした。

この他、前庭部から燃焼部にかけて、第3次床面と側壁を覆うように厚さ2 cmほどの白色粘土が均一に貼られている様子を確認しました。白色粘土に天井崩落土が突き刺さっている状況から、さらに新しい第4次床面を構築中に天井が崩落し、そのまま廃棄されたと推定されます。

【前庭部】燃焼部から焼成部の作り替えに併せて、粘土を貼り床面や壁を補修しています。燃焼部から掻き出された焼土や炭が多量に溜まっています。



①窯跡3 最終(3次)床面(北東から)
最終床面の上にさらに新しい床面を構築するため白色粘土を貼っている様子。
作業途中に天井が崩落しました。



②2次床面（北から）
階段状の焼成面で瓦が立てられて焼かれた様子がわかります。

B区・C区から出土した遺物

窯跡を中心に軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、須恵器坏、甕、長頸壺が出土しました。瓦はいずれも多賀城創建期（西暦724年ころ）の特徴をもつものです。須恵器は破片のため詳細は不明ですがおおよそ8世紀前半頃のものと思われます。

今回出土した多賀城創建期の瓦のうち、主なものを紹介します。

軒丸瓦（のきまるがわら）

軒にあたる部分に蓮華の模様をつけた丸瓦です。花びらが重なっていることから重弁蓮花文軒丸瓦と呼ばれています。多賀城の分類で〔型番120〕と〔型番121〕の2種類が出土しています。

軒平瓦（のきひらがわら）

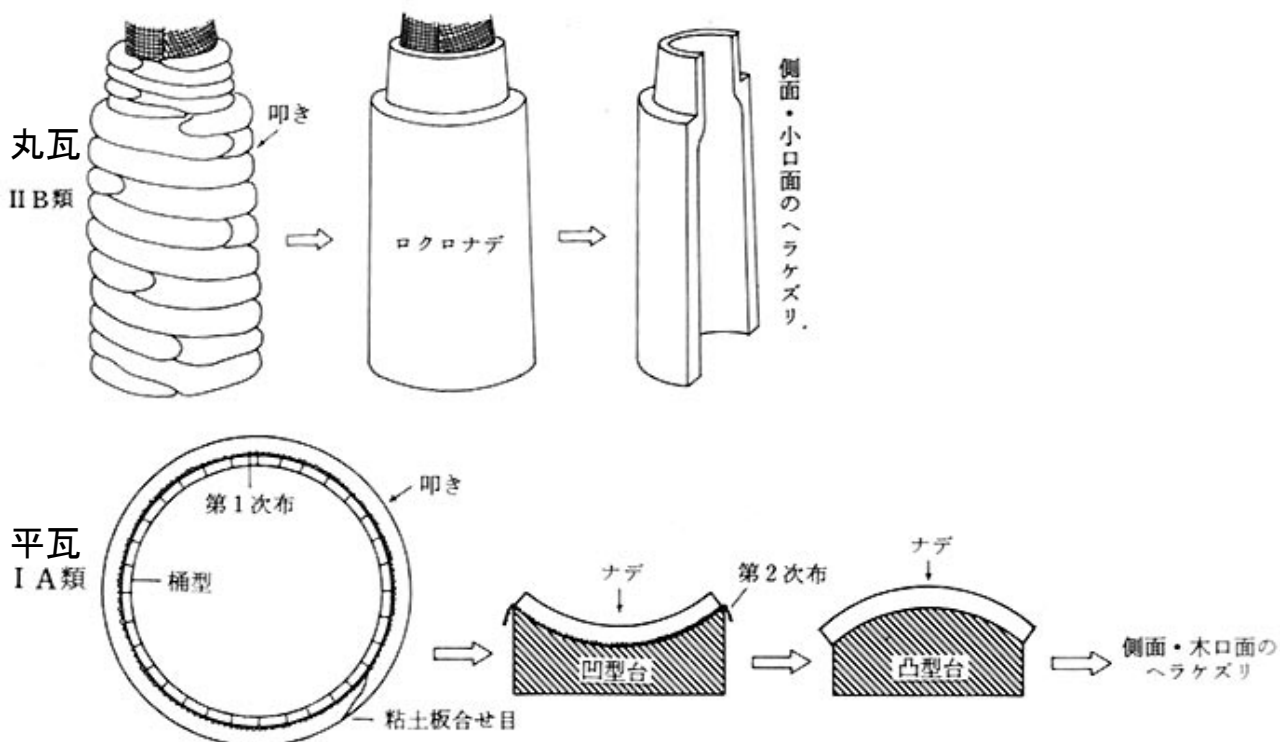
軒にあたる部分に、ほぼ平行する二重の沈線を手書きで描いた平瓦で、二重弧文軒平瓦〔型番511〕と呼びます。

平瓦

粘土板を桶状の木型に巻きつけ、その後4分割し、一枚ごとに調整台で凹面と凸面の両面を調整するもので、桶巻き作りと呼ばれています。多賀城では平瓦 A類に分類されています。

丸瓦

粘土紐を軸状の木型に巻き付け、ロクロで凸面をなでて平滑にした後、2分割したもので、玉縁（段）を造るのが特徴的です。多賀城では丸瓦 B類に分類されています。



丸瓦 II B類と平瓦 I A類の製作工程

4 まとめ

今回、3基の窯跡を調査し、窯跡1から多賀城創建期の瓦が大量に出土したことや窯跡3で瓦を焼成した様子等が明らかになったことなど、多賀城創建期の瓦を生産した木戸窯跡群を考える上で貴重な資料が得られました。

また、これまでの調査から、木戸窯跡群を構成する窯跡は「沼部」と呼ばれる湿地を取り囲むように、低丘陵の尾根筋を境にして東斜面と西斜面に向かい合うように窯跡5～8基が1グループとなって、数地点に分布することが次第に明らかになってきました。

一方、調査区の制限もありますが、瓦を造る場所である「工房」や、瓦造りに従事していた職人たちの居住域などは未発見であり、今後、本遺跡周辺の調査に期待したいと思います。



官営造瓦工房の想像図 原案／上原真人 作画／早川和子

イメージ図] 金子裕之編「古代史復元9 古代の都と村」138～139頁。講談社

図の窯跡は天井が地上にでている「半地下式」の窯ですが、本遺跡の窯はトンネル状に掘られている「地下式」の窯です。